

哲學研究

第百八號

第三十卷
第三冊

教育方法の原理 (承前)

伊藤 猷典

二 生命の見方 (つづき)

論歩は少しく逆行するが有機體に於ける自律に關し一層詳細を知る爲にはドゥ
リーシュの研究 Driesch, Hans: Philosophie des Organischen に一瞥を與へねばならない。氏
はこの事に關し三種の證明を與へた。その大要は次の如くである。

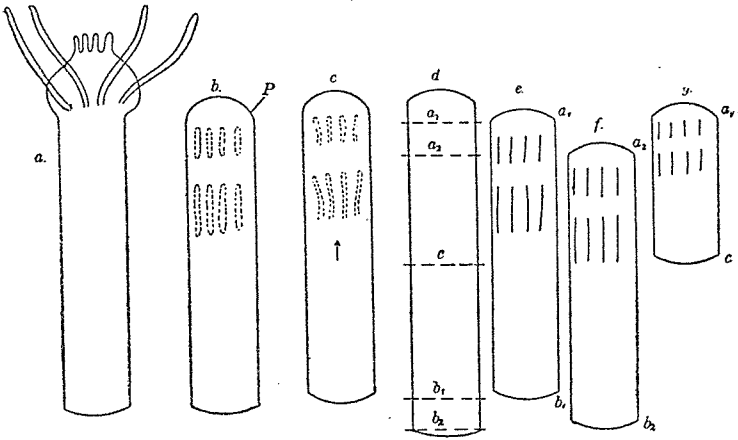
イ、有機體の形態生成に於ける調和的均衡能組織 (harmonische äquipotentialem System) の
分裂の研究より論證す。氏は該組織の分裂の形式をば次の式で表はした。

$$B(X) = f(S, L, E)$$

B は要素 X の定能 S は事實上存在する有機體の特殊の場合に於ける絶對量^{アブソリュートクォンティタツ}

有機體の要素の相對的地位、*E* 可能的な各種の場合に於て型に倣つた比例のとれた發展のある事はこの總計が單なる總計でなくして一種の組織を示すといふ事である。かゝる組織を含む豫能をば *E* で示す

かゝる組織の適例はツブラリアに於て見られる。吾人はその胴をば好きな場所で切りうる、而も胴の一定の場所が常に新らしき頭となる、但しその部分の總ての協力によりて。切斷の場所は全然吾人の隨意なるが故に復活する胴の各部分の定能はその地位の機能である事、該定能は胴の分離と共に變化する事、而もこれがこの組織の第一の特質である事を知る。猶重大なる事は各要素の運命が組織の事實上の大きさに從屬する事である。餘り長い胴ではその事は示されないが長さ十ミリメートル以下を切斷するならば新たに出來た頭の大きさは胴の長さに比例する。この從屬性が第二の關係を示す。



Figur 12 Tubularia

a. 大小の觸角を有せるヒドラント、b. ペリザルクに於けるヒドラントの復活、c. 同上、但し一層後期の状態、ヒドラント全體が場所に於ても又方向に於ても（方向は矢の示す方向に）定まつた生長過程を通してペリザルクから出て行く。d. ツブラリアの觸が a_1 、 a_2 又は b_1 、 b_2 片に切斷される。e. a_1 片に於ける觸角素の地位、f. b_1 片を同一の長さの a_1 片に於ける觸角素の地位、g. b_2 片の長さの半分の長さを有する a_1 片に於ける觸角素の地位。

前記の事は圖によりて一層明瞭になる。ツブラリアの頭は長細い鼻尖の付いた廣い基礎から出來てゐて無數の觸角を有してゐる。この觸角が肝要なものであつて、復活過程にはその素質が表れる。胴の内部には縦線からなる二個の環がある。線は折れて胴から離れ、只底だけで胴と結合する。それが出來ると新觸角が完成する。而して遂に生長過程は胴を取まく所の所謂ペリザルツ換言せば角狀の頭から新しき頭を作りだす。前記の圖の e と g とを比較すると兩者の觸角環の絶對の大きさは非常に異つてゐてそれは常に胴の實際上の大きさに比例せる事を知る。従てツブラリアに於て前記の式が完全に表はさるゝを知る。

而して前記の式中 S と L とは換言せば組織の絶對量と、一定點に對する要素の相對的地位とは獨立して變化しうるが E は常恒である。即ち豫能はその内に含まれる比と特殊の關係に立つ。然らばこの E とは何を意味するか。

ドウリーシュはこれに就ては、抑形態發生の本質は豫能手段、生成刺撃の三種の内容によりて規定されるのであるが E は勿論手段でも刺撃でもなく、又化學的の説明も足らない(アトムやモレキュールは水晶の如き立體幾何的に出來た形式の説明は出來るが、鼻、手、足の骨の如き形式の説明は出來ない)機械觀も不充分である。プロト

プラズマに於てもガスツルラに於ても何處を切斷しても同じものが生ずるが機械は切斷すれば最早機械ではない、又機械の一部分を擴張も一部分を切斷しても機械であるが然し同じ機械とは云へぬ。Eとは自然の眞の要素に對する表現である。生命は、少くとも形態生成は無機的事變の特殊の出來事ではない。生命は自存の者である。選言判断を取つた自分は此の立場を取らねばならぬ。これをば活力説又は生命の自律の學と名ける。Eをばアリストテレスの用語に倣つて活力(Entechnie)と名ける、而してこは要請であり、假定である。

ロ、遺傳といふ事實に基く證明。總ての有機體はその出發點を再び作る能力を有する。遺傳といふ事實から云へば生命は律動的現象である換言せば現象の一鎖である。個々の卵は種の分裂の最終の結果である。個々の卵の發展が複雑なる器械の基礎たる事が何等かの豫見を持たないで如何にして解決しうるか。如何なる種類の器械も發展の出發點であり、遺傳の基礎であり得ない。従つて吾人は總ての個體的形態生成の初めに存する或者を認めねばならぬ之を活力と名ける。

ハ、復組織の個性 Individualität der Zuordnung)の原理の分解に基く證明。畫家が犬を描寫するとする。其の際に、この犬あの犬私の犬友達の犬等何れも同一の刺撃である

その犬が東から來やうと西から來やうと何れの方面から來ても、又たとい事實上の網膜に映れる像は其の場合場合によりて異つてゐても常に同一のものとして知られる。この事の説明は惱に於ける豫め作られた物質的の受信器の假定だけでは説明できない、その個體が以前に出會つたものを刺撃によりて作つたといふ事を假定しない限りは。

總ての動作は外から歴史的に作られた反動基底 (Reaktionsbasis) の上に行はれた個別的刺撃と個的作用との復組織である。而して結果の個々の構成要素が必しも刺撃の個々の構成要素に依屬しないが故に復組織を説明しうる如き器械を考へる事は出來ない。

次に重要な事は動作の際の個々の復組織が歴史的基底に依存する事並にこの基底が外から作られるといふ事は極めて稀れであるといふ事である。動作の歴史的基底云はゞ動作に對する豫能は蓄音器又は物理化學の領域で考へられうる如き機械とは二種の重要な點に於て異つてゐる。第一に行爲に際し與へられた結果は歴史的に受取つた刺撃一は感覺であり一は運動であるとは異つた自然現象の領域に屬する。第二に歴史的基底は單に可能性の一般素材として役立つ。歴史的に

捉へられた刺撃の特殊の結合は決してその組織の特有性を固持しない、却てその要素に分解されその要素が更に新らしき特殊性に形を變へ個性を有する復組織となる。

かゝる動作する「或者」が筋肉運動の一定の特殊結合をなすの内在的の力を有する、勿論特殊の場合に行はるゝ結合はこの場合に活動せる刺撃の個性と過去に於ける總ての感覺の全體に依存するとは云へ。

かゝる或者をば身體を生成する^{ビビデン}行爲者を活力と名けるに對比し精神を指揮する行爲者をば Psychoid と名ける。

要之氏に従へば生きた個々の有機體は種々な要素が集つて特殊な状態を呈したものである、その各要素は化學的にも物理的にも特色づけられうる、けれどもその特色ある状態は、それを構成する素材に變化あるにもかゝらず依然として舊の儘に存する。有機體は種々な形に於て表はれる。發展といふ特有性、調節、再生、能働運動等の能力を有する。此等の性質能力から考へると有機體は無機的部分の集合とは考へられない、有機體の行動の内には無機的解釋と矛盾する部分がある、家屋が木や石の集合よりもより以上であり、家屋の概念が木や石の概念の下に屬せないと同様

に、生きた有機體はその部分の合計集合よりもより以上の或者を有し、この或者はそれを構成する部分の概念には屬せない。この或者をば活力と名けた。活力の多様性は外延的でなくして内包的である、又それはエネルギーではない(エネルギーは量的であり又量的に測定されうるが活力にはそれが無い)。活力はそれ自身に多様性を有してゐるがエネルギーにはそれが無い活力は有機體を害するやうな種々な事情とよく調和して行く、即ち伸縮自在の強さを有する。又活力は可能的な出來事を中止する吾人が復活とか適應とかいふ事の根據の下に判断しうる限り、活力は組織中に存在せる結合の間に起りうるやうな、そして活力の干渉なかりせば起るであらうやうな總ての反對作用をば必要な限り中止する(又化學的實體でもない。けれども活力は自然の要素である、たゞいそは空間に於ける自然にのみ關係し而もそれ自身は空間の何處にも存しないとは云へ。活力が空間的自然に於てなす役目は機械的に又エネルギー的に形式化されうる。内省分解をして見ると人間精神は個性と名くる特有の範疇を有する云々)と。

ドゥリシーユの説は大要右の如くである、摘録その要に當らず著者に禮を失するの憾みなきにも非らるも有機體中に自律の存する事だけはジエンニングの場合

よりも一層精密に把み得たと思ふ。

ウイルヘルム・ステルンが *Die Psychologie und der Personalismus*. 1917 I, 34—35, 23—24 に於て次の如くに論じてゐるのは正しくドゥリッシーの説に追従したるものとも云へやう。氏は曰く

「機械的生物學は有機體をば最終要素が非人格的な無目的の法則によりて互に結合せる集合にすぎないとなしたが、かゝる見方では最後の解決が與へられない。斯かる見方の存在理由は方法論上の分解が最小の成素に迄到らない場合にのみ存する。

「有機的生命は各瞬間に要素をば集めて一構ストラクチュール造に或は又生命過程となす様子は目的によりて規定せらるゝものとして示す、蓋し一體としての全有機體の目的によりて規定せらるゝものとして示す。血液の循環は個體の生命の状態の其時々々の要求に應じて作用し且變化する。消化作用は自己維持の課題に適合する。傷口に於ける身體的構成過程は「治癒」の方向に換言せば個體の維持の方向に働く。勿論常に必しもその目的が達せられるといふのではないが然しその機能(Funktionieren)たるや常にかゝる目的の方向に於て表はれる。而して最終要素其物並にそれに於て作用

する物理化學的過程は原則として盲目的である。換言せばかゝる作用の地盤たる全體といふものが存するか否かは無關心であるが故に吾人の因果的要求は更に一層の根據を追窮する。目的論的課題がこれを研究する。全體の目的に向けられたる過程はこの全體から自ら作用する働作アクトにのみ依存する。前述の消化作用は單なる化學的課程でなくして目的追窮ライスツングの作用である。この作用によりて有機體は自らを維持するのである。傷口の癒ゆるのは單なる機械的又は化學的に條件づけられた養生ではなくして脅されたる有機體の復活作用である。この際この目的論的作用は物理化學的法則と矛盾しない。寧ろ後者は前者の道具として働く。

「この場合この働作アクトに就て注意すべきは目的を意識アワケせる意圖といふ事ではなくて目的を追ふ傾向といふ事である。有機體が身體的に目的を追ふといふ事と意識アワケとは何等關係がない。

「猶注意すべきは物理的働作アクトといふ言葉は本當の意味に於ては理解されない。何故ならば物理的とはその働作に取ては單なる材料にすぎない。その物は直接經驗に於ては畢竟何物でもない。それは單に物理的經過の科學的説明の爲に吾人の要求せる必然的な因果的補足である。

「個々の働作は現象に對する統一原理であるけれども狭き時間的限界内に於てである。そは一瞬時に或は小時間内に表はれて來る意識體驗を目的に向つて綜合統一する。従てそは確實な (Zun) 心理的事實である。若し働作が唯一の統一原理であるとしたならば個人の内に存在する多様性が止揚せられて *unias* となる事はないであらう。何故ならば永き時間を通して曆日的ケローニッシュに表はれて來る各個人は不可商量のかゝる働作をなし遂げる。若しそれが單なる混沌たる體驗でないとするならば中點なき多様性であるだらう。 *unias multiplex* の理念は働作の系列をば今一段高き原理に従屬させる事を要求する。吾人は働作をば體驗に對立して *Wirken* をなすう要素として定義した。 *Wirken* は *Wirksamkeit* *Wirkungsfähigkeit* を前提とする。單に瞬間に存在する實在性として、因果性として完全に自立的に成立する行爲ケイトなるものを考へる事は出來ぬ。無からは何者も生じない。そは一時的の可能性よりもより多くの或者の表現として考へねばならぬ。能力性ポテンシャルディートなき現實性なるものはない。而してかゝる關係を説明する爲には吾人は總ての確實な過程アキユウケンをば曆日的に存在する能力性事情によりてはクラフトとして又はエネルギーとして示さるに迄遡らしめねばならぬ……」

ステルン氏の能力性なる言葉をドゥリシー氏の活力なる言葉に代へるならばこの文はドゥリシー氏の論文中に挿入するも讀者は何等論理上の矛盾を感じないであらふ。

上に述べ來つた諸家の説を總括して我等の取るべき道を定めんとするならばそれはレーブの説く機械觀を取るか、ジェニンング、ドゥリシー、ステルンの説く曰く自律説に従ふか、或はマクドゥガルの折衷説に従ふかの外はない。而してこれが根本の解決は、認識論的研究に待たなければならぬと信するが故に一先づその方面に眼を轉じその解決を得而して後本問題を解決する事とする。

二 生命の認識論的見方

生命を見るに當て物を主にして見るにしても心を主にして見るにしても、何にしても兩者の關係に觸れないでは問題の解決は出來ない。而して兩者の關係は時間上に於て前後の關係所謂因果にしても、又は目的と手段の場合の因果にしても、あるか同時の關係にあるかの二種であり、この二種を出でない。この二種を通例の用

語に從て精神物理因果性、精神物理並行論として表はし得る。而して該問題につきてはシグワルト氏七十年誕生記念論文集中に收められたるリツケルトの論文 *Psychophysische Causalität und psychophysischer Parallelismus* が多大の暗示を與ふるが故に、之を主なる參考として論述しやう。

精神物理因果性の概念は次の如くに種々に考へられうる。

イ、身體をば原子の集合から出來てゐると見る物理的の見方の本質は分量的規定にある。然るに精神は性質的のものである、若し精神が身體に屬するものとしたならば、精神はその内容をば純粹に量的な機械的原子界に屬しないものから得ねばならないといふ矛盾が生ずる、猶見方を變へて云ふならば、性質的存在は吾人に直接に與へられたる出來事の有するものであるが、純粹に量的に定められた存在は決して直接にはえられない、従つて精神は直接の實在性を有するが物質は現象と認められ、その本質は所與の背後に於て求められる。即ち精神物理の兩者はその内容、性質と分量から云つてもその存在の方法、直接な實在と現象から云つても全然比較し得べからざるものと云はねばならぬ。

ロ、因果性とは原因と結果との間に必然的の關係の存する事をいふ。而して因果

性には自然科學に於て云ふものと歴史科學に於ていふものとの二種の區別がある。前者に於ては因果相等 (Causa aequat effectum) を説き、後者に於ては因果不等を説く。因果相等の法則は因と果が相等しいと云ふ事が原則として可能である場合にのみ適用されうる。即ち自然科學の如く總てを量に還元する世界に於ては完全に適用されうる。かゝる因果性の概念は、内容並に存在方法に於て全然異なりたる精神と身體との關係に適用する事は永久に不可能である。即ちかゝる意味の因果關係は兩者の間に存在し得ない。物質界に於ては總ての變化は原子の運動に還元せられ且因果相等の法則に従つて運動は常に運動によりてのみ起り、運動のみを呼び起しうるのであるが精神の如くその概念上アトム運動として表はれなき存在は原因としても結果としても物質界にはその席を有しない。従つて精神物理因果性の概念は棄てなければならぬ。

さりながら化學や生物學の如き自然科學は性質的要素から成立てゐる所の概念を以て仕事せねばならない。従つてかゝる科學は直接に見出されたものを反省する事によりて得られる如き、換言せばその存在の方法から云つてもその内容から云つても精神と比較し得らるゝやうな概念に固着してゐる。かゝる概念構成は科學の

進歩と共に消え去り純粹に量的に定められたるものによりて置きかへられる一時的のものとしか思へないとも考へられない事はない。けれども生物學や化學が存在する限りこは性質を取扱はねばならない。最も一般的な物質論を如何に擴大してもこの性質的概念を止揚しえない。従つて物質界から性質を除かんと如何に自然科學的加工をなしても精神といふ概念は精神として、單にその性質的特質の爲に物質界との結合を除く事は出来ない。因果相等の原理から云へば精神物理は寄りつく術なく、而も吾人の體驗する實在に於ては結合するといふデイレンマに陥る。こは如何にせば逃れうるか。こは直接經驗の立場に於ける作用といふ概念が何を意味するかを明かにする事によつて得られる。

抑々法則の概念は自然科學の總ての概念の如く一般的のものである。而して吾人は一般的东西をば一度も直接に體驗し得ない、單に特殊な且個人的のものゝみを直接に體驗するにすぎなきが故に吾人の作用と名くる原本的體驗と因果法則の内容とは區別せんければならない、恰も個的體驗がそれを包攝する一般概念の内容から區別される如くに。一般の因果原理換言せば總ての出來事はその原因を有すこの法則も猶又自然科學的因果法則の概念も共に個的作用を前提としてゐる。何

故ならば若しさうでないとするれば個的身體的過程と個的精神的過程との關係が再び問題となる事はないであらう。又一般因果原理の概念と自然科學的因果法則とが如何に關係するかを知らんとするものも不合理であるだらう。前者は個的因果性の概念をば總ての實在の上に及ぼし、後者は個的因果關係の多くのものに共通なるものを綜合する。従つて兩者の概念は繼起よりもより以上のものを意味する所の個的因果結合の前提なくしては考へられない。

右の前提を承認するならば別して一般自然法則と個別的因果性との區別を固持するならば特殊は常に一般よりもより多くのものを含むが故に吾人が作用と名くる各實在も亦それを包攝する所の法則よりもより以上のものを含まねばならないその事からして次の事が起つて來る。即ち個々のものが他の個々のものゝ上へ因果的影響を及ぼすといふ事が、それが因果相等によりて表はされた一般法則概念中に入らないとの理由で以て除外されるといふ事は決してないといふ事が。總ての實在はその特殊性に於て又その個性に於て自然科學的一般概念の内容よりも遙かに豊富である。

因果相等の思想が吾人の體驗する實在界に對して如何なる關係に立つやを見る

に結果と名けらるゝ過程は原因と名けらるゝものとは異つたもの、もつと押つめて云へば初めそこになかつたものを持來すといふ事である。この場合に當つて等しいと云ふものは何も見出されない。機械的な自然界には勿論因果相等の法則が絶對的に妥當する、けれどもこの世界に於ては何者も新しい者は起らない、原子は永久に原子として同一である。原因と結果が内容上同一であり(續いて起る二種の音が、高低音色、繼期等の各點に於て區別されない従つて内容上同一である時)又は純粹に量的に規定しうる大さ(三角形の内角の和は二直角に等しい、何故ならば前者に於ける一定の量は後者に於ける如くに完全に表はれるから)を表はしうる場合には因果相等とは意味をなすが、因も果も内容上同一でもなく又量的に規定されうる大さを表はし得ない場合には原因と結果とが等しいといふ事は意味をなさない。

要之因果相等の法則は機械的な純粹量的の概念の世界に於てのみ行はる。吾人が一般に何か經驗的な従つて性質的な實在を互に因果的に結合せんとする場合に因果不等を認めねばならない。吾人が性質をば實在と見做し、そは原因を持ち、且作用しうるものであると見做す限り吾人はこの概念を否定する事は出來ない。

自然科学の如き一般性を目的とせず、一度限りの特殊の發展を取扱ふ歴史に於て

は因果不等の法則と必然の關係を有する。

従て精神物理因果性が許されるとしたならばそれは因果相等の意味に於てはな
くして因果不等の意味に於てはある。

精神物理並行論に就きては次の如くに考へられうる。

自然科學の課題は容易に把握し得ざる全體としての世界の經驗的多様性をば把
捉しうる概念の體系に持來すにある。而して物質界が空間を充す對象であり自然
科學の領域を物質界にのみ限る時それは最も完全に概念の體系を得る。この概念體
系に於ては總ての性質的並に把握し得られなき多様性は總て量的な従つて把握し
得らるゝ多様性に迄分解さる。その結果簡單なる事物の表象が生じそのものから
總ての物質が成立する。而してその唯一の變化は場所の變化と運動とである。か
ゝる科學的過程によりて總ての性質的多様性は機械的の意味に於ては把握し得ら
れなき部分として機械的に把握し得らるゝ實在と區別されうる。この區別せられ
た部分も概念的加工をなして把握しうる體系となし得る。けれどもこれは分量化
する方向とは異つた方向に於て行はれねばならない。而して世人はそれをば心理
學の課題となしたのである。

吾人がこれ等の概念の構成せる産物をばそれ自身に存在する實在と見做し且それを身體と精神として直接に體驗するものと同一視せらるゝかといふ疑問は全然否定される、何故ならばかくすれば全體としてこの世界は理解し得られないから。

身體の學と精神の學とは質と量との分離によりて成立した特殊科學である。實際上は常に結合してゐる要素をば概念上分離した事を意味する。従つて概念上の分離を止揚し全實在を統一的全體として把握せんとの試みがなされるや否や、特殊研究の興味に於てなされた片面的なる物理的並に心理學概念構成はその妥當を失はなければならぬ。

兩者が右のべる如き關係にある以上兩者が並行なりとはその意味をなさない。

物理的事變は少なくとも或點に於て常に集合ゾグレンであるが精神的事變は統一である機械的な組織ゾグレン或る意味に於て雜然なる集合にすぎないものの一部分に於ける運動又は變化が集合でない統一の意識を伴ふとは考へられない。勿論機械的組織の内には全體といふものが、純粹な形式的幾何的意味に於てのみ事實上存する。けれどもその中に起る個々の事變は全體の事變から獨立してゐて單に直接の條件、直接の原因に從屬してゐる。かゝる理由からして機械的組織は精神的事變の表現の空間

的結果であるであらうがこのものが並行的に精神的事變の表現を伴ふとは考へられない。

世界は意識の内容でなくして却て意識は純粹認識概念である、その代りに内在的直接存在を置きうる。身體に相對してのみその意味を有する精神といふ言葉は總ての經驗的實在を表示するものとなるや否やその意味を失ふ。又、吾人が精神をばその直接性に於て把握すると同様に所與の物質界を直接に把握するならば、物と心とは内容上では或部分は比較し得られない、兩者の間の限界を嚴密に引く事は困難である。運動とか形態とかは物質界に數へられうる。けれども感情、意志行爲等の如きものは純粹に精神として眺める。又何れの領域にも數へられうるものもある。換言せば同一の内容が單に物質的と見做さるゝのみならず精神的とも見做される。従つて吾人は根原的には統一的な精神物理界の概念をうる、而してこの直接的な體驗は吾人が如何なる理論を構成しうることも、それによりて吾人は世界をば二種の原理的に比較しうべからざる部分に分つて毀損されなき經驗的實在として存する。従て精神物理といふ二種の内容は直接經驗の立場に於いては止揚されうる。リツケルトの一元論の立場から云ふならば精神も物質も共に統一的な眞の世界實ヴェルトヘブスタ

體の外面的に分離せる屬性と解すべきであらう。(Richert, H.: System der Philosophie I 1921. P. 194-5)

「自分がランプを見る」といふ事と並行して自分の腦の内にエネルギーの強さの變化が起るか、どうかを驗べて見ると「並行に起る」といふ事は「同時に存在する」といふ事である。「ある」とは他面から云へば、自分に知覺せられる、又は少くとも自分に取ては知覺されうるものである」といふ事を意味する。嚴密なる理想主義はかく云ふ、理想主義に基いた並行論は事變の連續を要請せねばならぬ、例令ば自分が視神經に於て或る出來事を見、一定の腦の部分に於て感じた後に自分はランプを見る、自分がランプを見ると同一の瞬間に於て自分は自分の對象としての腦中に起つた一定の出來事を見又は感せねばならぬ。この「知覺せられた出來事」は自分の意識してゐる「出來事の知覺」とは全然同じでない。「知覺された出來事」は曖昧であるかも知れぬ、けれども「出來事に就てなせる自分の知覺」は確かに曖昧ではない。後者に對して腦の中に新しい變化が存せねばならない、何故ならばその事の知覺は新しい變化を要求するから。すればそれは並行といふ事は出來ない。嚴密な理想主義の立場から云へば所謂並行の結果は並行に起るべきものよりも常に後に「存」する。而もこれぞ

活力説の擡頭する根據である (Driesch, op. cit. p. 296—299)

精神物理因果性、精神物理並行論に就て知りえた事を要約すれば、換言せば我々は生命をば物を主として見るか心を主として見るかに就て知りえた解決の方法を要約すれば次の諸點に歸着する。

イ、機械觀は片面的の見方にすぎなき事従つてレーブや石川博士の説は一面的なる事。

ロ、自然科学的概念構成法に従ひ因果相等と見る見方からしては精神と身體との間には寄り付く術はないが、歴史的な個別的な因果不等の法則を認める立場からすれば兩者間に關係の生じ得なき事なき事。

ハ、精神と身體とを相對立さす事は幼稚な見方である事、生命現象に就てはこれよりもつと徹底した見方の存する事、従て身心並行論は取りえぬ事。

ニ、精神といふ言葉の中には本質的に異つた二種の概念を含める事。

ホ、整合せる理想主義が解決の方途を示せる事。

の五項に歸着する。

而してニに就て今一度説明せんに、

フエヒネルの云つた心的強度は物的強度の對數であると云つた場合の精神とは空間に於ける延長の有無によりて物心を區別したものであつて素朴なりこの譏を免れない。ブレンタノーの言葉を借りて云へば Dingerscheinung (das Erlebnis) 2 erscheinen-ende Dingとの間には截然たる區別をせんければならない。掌の上に綿をのせて重さを感じなかつたり鐵丸をのせて重さを感じたりする現象と感せんとする我の作用其物との間には重要な區別が存する、換言せば感ずる重さと重さを感ずる事とは異なる。我々は均しく精神現象といふ言葉を用いるともその内には精神内容と内容に對する意圖關係 (intentionalen Beziehung auf einen Inhalt) との區別を立てねばならない。ドゥリーシュの云ふブシコイドもかゝる意味に解する時その存在の正當の理由を有する。

次に身體の場合に於ても精神の場合に於けると同様の區別がなされる。一定時に於ける生活體を構成する物理化學的要素は、その生活體から生ずる事變の根據の總ては、一部分の根據にすぎない。ドゥリーシュの所謂 E を承認せねばならない。E が精神の場合に於てブシコイドと名けしものと同じきものならば身體はその運動に際してブシコイドの作用に従ふと云はねばならぬ。

故に精神をは前述の二種の意味の内後者の意味に局限し、個別的な因果不等の法則を承認するならば精神と身體(精神の前者の意味のも含めて)との間に因果關係が成立する。而して斯く見る事が最も論理的に整合してゐるのではなからうか。

ステルンが前掲の書 (P. 38 ff.) に於て動作とか性向とかは第一義的には *meta-psychophysische* のものである而して心的とか物的とかいふ事は第二義的のものである。何故ならば思考とか意欲とかの動作はそれ自身には心的のものでなく單にその動作の對象又はその終局目的に就ての心的體驗を有するといふにすぎない。又反射、呼吸消化といふ動作も其自身には物的のものでなく單に物的素材に即して働くといふにすぎない各種の行爲はその個體の目的に向けられた傾向を具有する統一行為であつて、それが心的であるか或は物的であるかは全然關係ない。物心の彼岸に立てゐる。普通に自我は個體の心的機能の總括者として、身體は個體の物的機能の統一源泉として置かれてゐる。けれども此等の區別は抽象にすぎない。自我の本質はそれが心的現象を有するといふ事ではなくして、個的生命の完結の爲に自我が心的現象を總括し且それを自己の内面的目的努力の遂行に向けるといふ事であり。

身オルガニスム體の本質はそれが物理的現象を示すといふ事ではなくして、個的生命の完結の爲

に身體が物的現象を總括してそれを自己の目的努力の遂行に向けるといふことである。個的化する様子と目的を追ふ作用とが本質的特徴にて兩者共通である。

この共通の本質を捉へる時、物心の彼方にある人間の本質を捉へるのである、自我と身體との二重統一は唯一の統一として理解されると云へるのは斯かる立場にある生命觀を最も要領よく提示せるものと思ふ。前掲のナン氏の説ける所に比し數段の進歩あるを見る。

生命を右の如く解する事によりて身體精神の關係を矛盾なく説き得るではなからうか。かく解する事は人或はメタフィジックに墮在すと譏らん。されど一大技術家が出て物理化學的要素を集めて生活體を構成して見せてくれる迄はこの立場を棄てまい。それ迄はドゥッリーシュに倣ひ自分も亦Eを要請する。假定する。個々の生活體が生れる以前は如何にあつたか、死後は如何にあるかは科學的には何も云ひ得ない。けれども生活體が生活體として存する間はかく假立し、かく要請せざるを得ぬ。アプリオリーのアプリオリーを説く人形而上的の立場を取る人も必然にこの立場を取らざるをえないのでなからうか。

四 生命の根本特質

自分は今暫く前記立場に立ち前記の諸氏やリット(哲學研究第八三號所載の拙稿参照)やホーン(Geist der Erziehung, 1917, P. 46—47)等の暗示に基きて生命の特質をば從て人にありては人格の特質をば次の如くに云はんと思ふ。

「人格とはそれ自身に構成力を持つた統一體である」と。生命を右の如く解する事からして必然に次の二つの事が起つて來る。

前掲のドッリーシユの有機體を表はせる式にても明かなる如く E が生活體の全部ではない。その外に S あり I がある。生活體は二重の鎖を以て世界に秩序づけられてゐる、時間的には種族の系列に、空間的にはその周圍との結合に於て。過去の世界と周圍の世界とは兩方の世界條件であり兩種の非我である。そのものからして自分といふものがその特質を得るのである。これ等は E に對し量的段階として存せずして質的的關係に立つ。 E はこれと接觸し同化する事によりて生命の内容益々複雑に豊富になる。生命は卵の儘にゐるのでなくして變化し複雑に豊富になつて行く、即ち地上の無機物の如く靜止の状態にあらずして絶へず動いて膨れて行く。一言にして云へば發展がある。從て人格は次の如くに云へやう。

「人格とはそれ自身に構成力を持つた發展する統一體である」。

次に種族の系列と周囲の事情とは經驗的のものである。従て差別的のものである。人格がこれと必然の關係を有する事は前述の通りである。即ち人格には差別が生ずる。物にありては他の物を以て比較され、測られ、又交換されうるもので個別的な獨立自存のものではないが、人格にありては他と比較され、他を以て測られ、又他と交換され得なき個別的な獨立自存のものとなる。單なる物の區別ではなくして只一度限りなる特殊性、個性である。人間の類型、種族の代表等の依りて比較さるゝ調和點あるにかゝわらず、又人格的生起を支配する種々なる合法則性あるにもかゝわらず、常に究極は各人格は他の人格に對し自己特有の世界を持つてゐる事となる。一言にして云へば各人格は個性を具へてゐる。従て人格は次の如くに云へやう。

「人格とはそれ自身に構成力を持ち個性を具へた發展する統一體である」と。

余はかくして證明し得ざる而も吾々の必然想定せざるを得ざる根本假定を得た而して教育者が被教育者の天職の遂行を促進せんとする場合には必然にこの根本假定を認めなければならぬ。従て余は之を教育方法の原理と呼びたい。第一の假定より出るものをば教育に於ける自律の原理、第二の假定より出るものをば發達の原理、第三の假定より出づるものをば個性の原理と呼びたい。

自分がかゝる原理を立つる時ナトルプの學説を知る人は社會の原理をどう取扱つたかと反問されるかも知れぬ。それに對しては簡單に次の如く答へる。自分はそれをば發達の原理の内へ含めてしまつた。何故ならば生命の形成に取て社會は不可缺の素材なるも、唯素材にすぎない。發達に依屬して考へられるものである故に原理として發達の原理以外に獨立の地位を有すとは考へられない。猶且素材としても生命發達の毒材の全部ではない。それには周圍の世界の外に過去の世界遺傳といふ素材も同様に重要である。

前記の三種の根本特質が何故に存在するか、又如何にして可能であるかも現在の自分には判らない、或は神祕として、永遠に我等の認識の達しえなき彼岸に存する謎であるかも知らぬ。現在我等の知りうるのはその様態のみである。自律は我等の認識の世界道德の世界に於て如何様に開展して、行くか、生活體は如何様に發達して行くか、個性は如何様に存在するかを究め以て教育方法の法則を示す事が自分の今後の課題である。(未完)

参 考 書

Hinswanger, Ludwig: Einführung in die Probleme der Allgemeinen Psychologie. 1922

Driesch, Hans : Philosophie des Organischen. 1909

〃 : Leib und Seele. zweite Auflage 1920.

〃 : Der Vitalismus als Geschichte und als Lehre. 1905.

Hidezumi Ishikawa : The Fundamental phenomena of Life. 1924.

Mc Dougal, William : Psychology. The Study of Behaviour 1912.

Numm, T. Percy : Education its Data and First Principles 1920.

Rickert, Heinrich : Psychophysische Causalität und Psychophysische Parallelismus. (Philosophische Abhandlungen. 1900.)

〃 : System der Philosophie I.

Stem, William : Die Psychologie und der Personalismus 1917.

〃 : Die Menschliche Persönlichkeit 1923.

White, William A : Mechanism of Character Formation 1920.

セブツク・サエフ著
神田左京譯 生命の機械觀